

体験型教育が青年期の伝統文化受容に及ぼす影響に 関する探索的研究

An exploratory study on influence of experience-based education on
acceptance of Japanese traditional culture in adolescence.

松 島 暢 志・清 水 美 紗¹

MATSUSHIMA Nobushi and SHIMIZU Misa

キーワード：体験型教育・伝統文化・文化受容・茶道・教職実践演習

問題

平成 18（2006）年に改正された教育基本法において、「教育の目的」（第一条）を実現するために、第二条に 5 つの「教育の目標」が新設された。その第五号には、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が明記されている。それに準じて、学校教育法も改正され、二十一条に義務教育における 10 項目の目標が設定され、その第三項に「我が国と郷土の現状と歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養うとともに、進んで外国の文化の理解を通じて、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」が加えられた。また平成 25（2013）年に、「和食：日本人の伝統的な食文化」がユネスコ世界無形文化遺産に登録されたことを契機として、日本の生活の特色を表す食文化、茶道等の「伝統的な生活文化」の振興も求められるようになった。これらのことから、現代日本において、自国の伝統と文化を学ぶこと、またそれによって他国の文化を尊重する態度を養うことが要請されていると言えよう。

しかしながら、現状を鑑みると、若年層の伝統的生活文化に対する意識はむしろ減衰している。茶道・華道の団体に質問紙調査およびヒアリングを行った文化庁の「伝統的生活文化実態調査事業報告書」（2016）では、各文化団体の会員数の減少と高齢化、また伝統的な生活文化に触れる機会そのものが減少しているという問題点が共通して挙げられた。この原因として、「生活様式や生活空間の変化により物質的にも伝統文化離れが進み、一層伝統文化への理解が薄くなった」（文化庁、2016）といった、物的環境の影響が挙げられている。一方、例えば茶道を例にとっても、幼稚園・保育園等でのこども茶道教室や、学校茶道としての小中高等学校等での茶道部など、教育現場で触れる機会、無いとは言えない。高等教育でも、茶道を基幹科目として教育活動を行っている機関も存在する（川原・萩原・新井・廣瀬・座間味・安徳、2017）。しかしながら、このような教育現場における伝統的生活文化の体験ないし教育の効果については十分に検討されているとは言えない。

現実の世界や生活の世界と身体全体を使って実際に関わっていくことを「体験」といい、こうした体験によって外界の事物や事象を学びとっていく学習方法や形態を「体験学習」あるいは「体験活動」という（本稿では「体験型教育」と呼称する）。こうした直接体験による学習は、文字や映

¹ NPO 百千鳥

像を媒介にした間接体験で得る学びとは質を異にすると考えられている。平成元（1989）年の学習指導要領の改訂以降、このような体験型教育の重要性が強調され、「生活科」や「総合的な学習の時間」のような、体験を通じた学びを重視する科目が新設された（渡辺，2007）。体験型教育が強調されてきた背景には2つの理由があるとされる（渡辺，2007）。一つは、知識の系統的教授に見られる言語中心主義に対する批判からである。どれだけ単語を暗記していても、経験と結びつかなければ空疎なものであるし、言語化できない「暗黙知」も存在する。もう一つは、子どもの体験の貧困化からである。様々な要因により、子どもが海や川で釣りをしたり、高齢者の世話をしたりといった、自然体験や生活体験は漸減している。これらを補完する意味で、体験型教育が現在の学校教育で重視されるようになっていった。

学校現場における体験型教育は広範囲に渡っているが、主な領域を挙げると以下のようなものがあるとされている（東京学芸大学，2008）。

- ①自然体験（生き物体験，天文気象体験など）
- ②文化体験（ものづくり体験，産業体験，伝統文化体験，異文化体験など）
- ③社会体験（人間関係体験，就業・職場体験，社会参画・奉仕体験，集団宿泊体験など）
- ④身体的体験（基本的運動能力体験，危険予知体験，健康安全体験など）
- ⑤心の体験（感動体験，失敗・挫折体験，成功・成就体験，自己理解体験など）

これらの体験型教育の効果はいくつか検証されている。例えば①に関しては、小学校での農業体験が児童の農業への理解や自然に対する感覚を深めたとするもの（丸山・浅野・菊池，2004），②に関しては、ゆかたを着用する体験を通して、中学生の和服への抵抗感が薄れたり、色柄の印象の違いに気づくようになったとするもの（川端・小林・加藤・薩本・齊藤・呑山，2013），③に関しては、体験型教育が看護学科に所属する短期大学生の高齢者に対する認識を変化させたとするもの（竹内・横川，2000）などがある。しかしながら、多くの体験型教育で教師側が期待する効果は、コミュニケーション力をつけたい，社会的スキルを高めたい，集団活動への参画意欲を高めたいといった，児童・生徒集団で活動を行うことによって培われる様々な社会的コンピテンスに，主な焦点が当てられてきたのも事実である（鈴木，2007）。伝統文化に関しても，茶道体験が幼児の向社会的行動（配慮行動）に影響するかを検証したもの（宮本，2013）や，茶道教育が短期大学生のホスピタリティを促進するかを検証したもの（川原ら，2017）など，茶道文化に対する態度そのものに焦点が当たったものではないものが多い。

目的

本研究は，先述したような，伝統文化の受容が薄れているという現状を踏まえて，茶道という題材を用いて，体験型教育がどのように文化そのものの受容を促進するかを検証することを目的とする。今回は対象者を社会に出る直前の，高等教育機関に所属する青年とした。学校教育法で明記されたこともあって，これまで体験型教育は主に義務教育課程で重視されており，先行研究も多くは小中学校の児童・生徒を対象にしたものであった。もちろん，伝統文化を早期に体験することが，その文化に対する肯定的な態度の素養を培いやすいであろうことは想像に難くない。しかし一方で，伝統文化を体験した上でその意味を理解し，その後の自らの生活に文化を反映させるかを自発的に選び取ることに限っては，アイデンティティを選択・構築する青年期だからこそ可能なことだとも考えられる。そのよう理由から本研究では，次年度からの就職を控えた学生を対象に，伝統文化に関する体験型教育の効果を検証することとする。

方法

デザイン

茶道体験の前後で茶道への態度に関する質問紙（プレテスト、ポストテスト）を行い、体験の効果を検証した。

対象者

F市内の公務員専門学校（ISCED-5Bに分類される）の平成29（2017）年度の授業の一環として実施された「茶道体験講座」に参加した専門学校生139名（Range：19-20歳 Average：19.67歳 女性35名、男性104名）を調査対象とした。このうちプレテスト、ポストテストが揃わなかった6名と、茶会経験の項目が未回答であった4名を除いた129名が最終分析対象者となった（回収率：92.8%）。

「茶道体験講座」のねらいと目的

「茶道体験講座」は、公務員総合科2年コースの2年生全員を対象として実施された。対象者は公務員試験を終え、次年度からの就職を控えており、社会に出る前に日本文化に触れる機会を持つことをねらいとしていた。なお、本体験講座の実施にあたっては、以下の3つを講座の目的として設定し、参加者に周知した。

- 1) 茶道体験を通して日本の文化に触れ、日本の良さを再認識する。
- 2) 他者をもてなし・もてなされる体験を通し、茶道の決められた手順に込められた意味を考える。
- 3) 自分自身の国の文化に興味を持つことを通して、「多様性を理解し受け入れる心」を育む。

手続き

約30人編制の5クラスを担当し、5回に分けて各クラス1回の体験型教育を実施した。1回のセッションは、移動、休憩等も含めて約4時間で、①導入の講義（50分）→②茶道体験ワークショップ（100分）→③クロージング講義（50分）という構成であった。

- ①導入の講義：第1著者と第2著者が担当した。まずプレテストを実施し、それに続き座学形式の授業やクイズ形式のワークをしながら、茶と茶道の歴史、茶道における考え方について講義を行った。
- ②茶道体験ワークショップ：第2著者がファシリテートを担当した。学校内の体育館に置き畳を10畳分設置し、行った。参加者はまず、茶わんや箸の扱い方について教授された後に、亭主（著者たちとは別）による茶道の点前の実演を鑑賞した。その後参加者は2人1組になり、それぞれ相手に茶を点てる／点ててもらったものを頂くといい、もてなす側／もてなされる側双方の役割を相互に体験した。このワークショップを通じて講師からは、「道具を大切に扱うこと」、「箸の正しい扱い方」、「相手をもてなすこと」、「相手に敬意を示して思いやること」が強調された。
- ③クロージング講義：第1著者と第2著者が担当した。まずポストテストを実施し、その後ワークショップで感じたこと等を、グループワークをもとにシェアリングした。それぞれの国や土地には、それぞれの魅力的な文化や習慣があることを知り、多様性を受け入れる心をもつための第一歩として、「自分自身の国の文化に触れ、興味を持つこと」が、講義の中で伝えられた。最後に、全体を通しての意見、感想を自由記述式の質問紙で尋ねた。

質問紙の構成

プレテスト、ポストテスト共通で、茶会に対するイメージをSD法で測定した。使用した形容詞対は、「かたくるしいーしたしみやすい」、「非日常的ー日常的」、「こわいーやさしい」、「つまらないーたのしい」、「敷居がたかいー敷居がひくい」の5項目であった。これらの項目についてそれぞれ5件法で回答を求めた。またプレテストのみで、年齢、性別、これまでの茶会への参加度合い（今

回がはじめて／何度か参加したことがある／よく参加している)も尋ねた。

調査時期

2017年11月～12月

結果

茶道経験の有無

分析対象の129名のうち、茶道体験が初めての参加者は106名(82.17%:女性24名,男性82名),何度か経験がある参加者が22名(17.05%:女性9名,男性13名),よく経験している参加者が1名(0.78%:女性1名)であった。この結果を受けて,以下の分析では初体験群106名,経験あり群23名として,比較を行った。

体験型教育の効果

被験者間要因の経験の差(初体験群・経験あり群),被験者内要因のプレテスト・ポストテストを独立変数とし,茶会に対するイメージをポジティブな方向付けで得点化(1-5点)したものを従属変数として,それぞれの得点について2要因混合の分散分析を行った(Figure 1参照)。

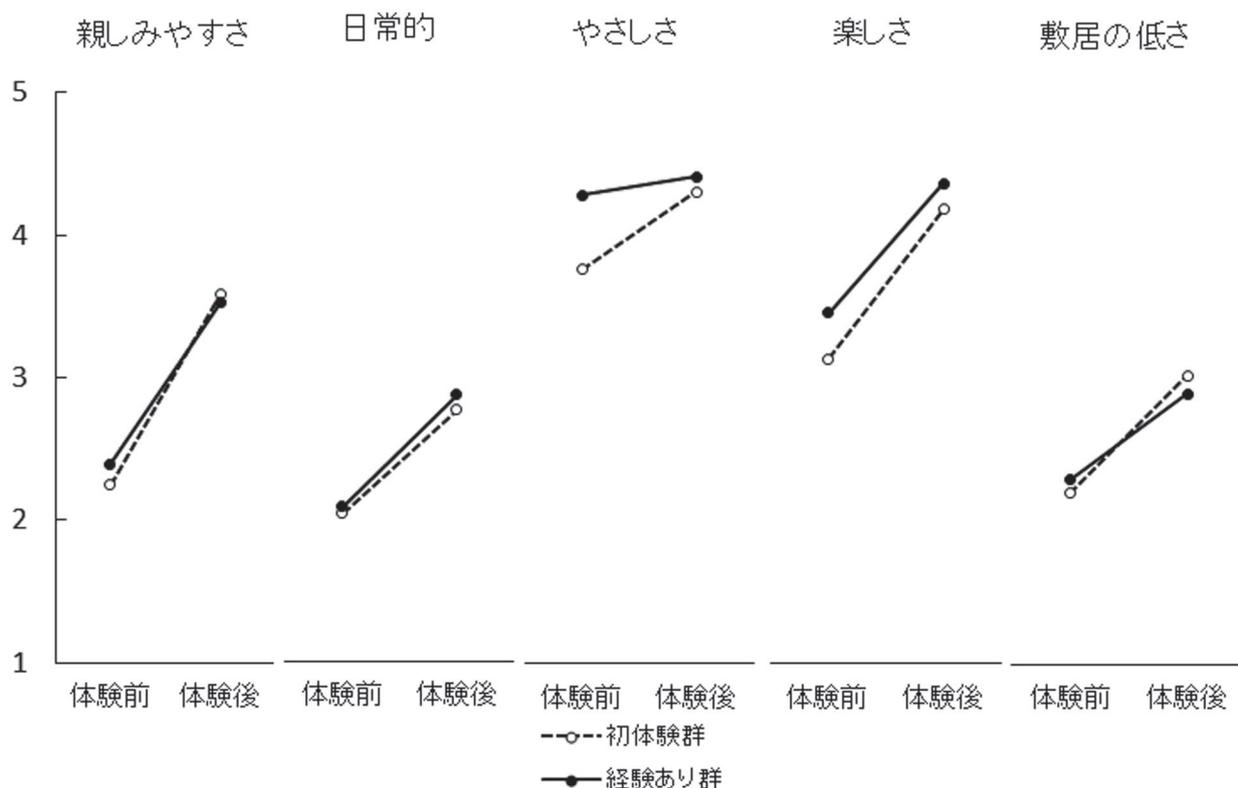


Figure 1. 体験前・体験後の各項目得点の平均値の比較

「親しみやすさ」に関しては,事前事後の主効果が有意で($F = 83.98, p < .01$),経験の主効果と交互作用は有意ではなかった。「日常的」に関しても,事前事後の主効果が有意で($F = 43.73, p < .01$),経験の主効果と交互作用はともに有意ではなかった。「やさしさ」に関しては,事前事後の主効果が有意で($F = 7.21, p < .01$),経験の主効果は有意傾向であったが($F = 2.84, p = .094$),交互作用は有意ではなかった。「楽しさ」に関しては,事前事後の主効果が有意で

($F = 99.60, p < .01$), 経験の主効果と交互作用は有意ではなかった。「敷居の低さ」に関しては、事前事後の主効果が有意傾向であり ($F = 3.73, p = .056$), 経験の主効果と交互作用は有意ではなかった。

考察

本研究の目的は、青年期を対象に、茶道の体験型教育をすることで、どのくらい茶道という伝統文化の受容を促進するのかを検証することであった。まず、これまでの茶道経験(茶会への参加経験)に関しては、8割強の参加者が今回の茶道体験講座が初めての体験だという回答であった。これは、「伝統的な生活文化に触れる機会そのものが減少している」とした文化庁の報告(2016)を、実際の数値として示したものと言える。

次に2要因分散分析の結果から、「親しみやすさ」、「日常的」、「やさしさ」、「楽しさ」、「敷居の低さ」のすべての項目において事前事後の主効果が有意であり、茶道体験講座のあとに評価得点がポジティブ方向に上昇した(「敷居の低さ」のみ有意傾向)。経験の主効果は「やさしさ」においてのみ有意傾向であり、茶道の経験者は、それまで未経験だった参加者と異なり、体験前・体験後ともに「やさしさ」を高く評価する傾向にあった。すべての項目において有意な交互作用は認められなかった。このことから、茶道体験講座の受講は「親しみやすさ」、「日常的」、「やさしさ」、「楽しさ」、「敷居の低さ」すべての項目において、茶道に対する印象をポジティブに変化させる効果を持つと示唆される。なかでも「やさしさ」については過去の茶道経験がポジティブな評価を導くことから、茶道は「やさしい」、もしくは「こわくない」というイメージは、ひとたび体験すればその後も長期的に持続する可能性が示唆された。

なお、「敷居の低さ」について事前事後の主効果が有意傾向と限定的であった点については、2つの解釈可能性がある。1つは、茶道は「敷居が低い」というポジティブ評価を得るためには1回の体験では十分でなく、継続的な体験が必要となる可能性。また、もう1つの可能性を考える際に、質問紙を実施する中で「敷居が高い/低い」という項目について「どういう意味ですか?」という質問が学生から散見されたことを付記せねばならない。現代の20歳前後の学生にとって「敷居が高い/低い」という表現が既に日常的ではなく、項目そのものがわかりにくかったという可能性が考えられる。この点については今後項目の改訂も含めて検討していきたい。

また、学生時代の体験によって生じた伝統文化への肯定的な印象が、社会に出た後の実際の行動の変化(例:家庭で抹茶を飲むようになった、茶会に参加するようになった)につながるかの検証も、今後の課題として必要であろう。華道・茶道といった伝統的生活文化は、その内実を知らないものにとっては、単なる高価な趣味として考えられやすい(文化庁, 2016)。一度体験したことで態度は肯定的になったとしても、それを日常的な活動にする際の「敷居の高さ」を感じることも多いと考えられる。参加者の、卒業後のフォロー調査をすることで、この点について今後明らかにしていきたい。

最後に、体験講座に対する参加者の感想をいくつか紹介する。なお記述は原文のままである。

- ・ 茶道というもの自体は知っていたけど実際にどういうものなのかやなぜ茶碗をくるくる回すのか詳しいことは全然知らず、今日実際に体験することで1つ1つの動作を知り、私を感じていた堅苦しさはあまりなく楽しいものだと感じました。今日は茶道を知る非常にいい経験になりました。(20歳・男性)
- ・ 今日初めて茶道をやってみて、分からないことや初めて知ったこといろいろあったけれども、や

はりイメージしていた茶道より格式高いものではなかったし、これから自分達のような若者がそういった文化を守っていけるようにいかななくてはならないと思ったし、自分にも出来ることがあると思ったのでこれから茶道のことをもっとしれたらいいと思いました。(19歳・男性)

- ・初めて茶道をしてみて、正直難しくてきつかったです。しかしなにか日本の文化にふれているという感覚がして楽しかったです。一つ一つきちんとしたルール、動きがあり、それにはすべて意味があるとわかって、とてもすごいと感じました。日常的にはないことだと思っていたけど、日常にも生かせることもたくさんあったので、両親などに伝えたいと思いました。(20歳・女性)
- ・実際に茶道をやってみて、自分の国の文化を体験することで、より日本の文化に誇りを持って他の国の方に日本の文化を知ってもらえると思いました。私は海外の文化にとっても興味がありますが、これからは日本の文化を発信していくことができれば良いなと思いました。(20歳・女性)
- ・日本の伝統文化はとても美しいしカッコいいと思った。かたくるしいイメージはまだぬぐいきれてない部分もあるけどもそれでももっと学んでみたいと思えるものだった。庭園等にも興味が沸いたしいつか見に行ってみようと思った。茶室にも行ってお茶もみてもみたいと思った。(20歳・男性)
- ・日本人だけど知らなかった「日本の文化」を改めて体験することができてとても良かったです。今日のことを友人などに伝え、「日本の良さ」を広めていくことに携わっていきたいと思いました。私自身、日本の文化はとても魅力的だと思っているので休みの日、空いている日に触れられたらいいと思います。(19歳・女性)

参加者の感想を概観すると、たった一度の、しかも簡易的な茶道体験ではあったが、「日本の文化に触れ、日本の良さを再認識する」、「茶道の決められた手順に込められた意味を考える」、「自分自身の国の文化に興味を持つことを通して、多様性を理解し受け入れる」という今回の茶道体験講座の目的は、すべてとは言わないまでも伝わったと考えられる。前段で述べたように、これを今後の行動に移すかどうかは参加者次第であり、このまま持続しないという可能性も十分にありうる。とはいえ、感想に書かれたような印象をもった状態で社会に出ることは、少なからず意義あるものだと期待したい。

本研究をまとめると、以下のようなことが示唆される。まず、体験的教育が茶道に対する印象にポジティブな変化を与えることが明らかとなった。なかでも茶道は「やさしい」という印象については長期的に保持される可能性が示唆されたことから、このような体験講座の実施は茶道文化に対する受容的態度の促進に寄与しうると考えられる。また、本体験講座は一学年に在籍する全学生を対象として実施されたものであり、茶道に興味がある学生を対象とした選択授業ではないという点も特筆すべき点である。体験的教育が個々の学生の事前の興味や経験の有無に関わらず、文化に対する受容的態度を促進するのであれば、学校教育という一斉教育の場においてこのような体験の機会を設けることは文化の理解と受容に大きな力を発揮すると言える。このような文化体験は選択授業やクラブ活動という形態で実践されることが多いが、学生全体に文化を体験する機会を与えることは学生の選択の幅を広げるためにも有効であると考えられる。

参考文献

文化庁文化財部(2016). 平成27年度伝統的生活文化実態調査事業報告書.

川端博子・小林由実・加藤順子・薩本弥生・斉藤秀子・呑山委佐子(2013). 文化の伝承を手がか

りとする衣生活学習への試み ―ゆかたの着装を題材とした教育プログラムの検討―. 埼玉大学紀要 教育学部, 62 (2), 67-81.

川原ゆかり・萩原宏美・新井浩之・廣瀬美由紀・座間味愛理・安徳勝憲 (2017). 「茶道文化」教育の教育効果に関する探索的研究 ～ホスピタリティの育成に着目して～. 長崎短期大学研究紀要, 29号, 1-11.

丸山敦史・浅野志保・菊池眞夫 (2004). 小学校における農業体験の効果 ―東京都練馬区を事例として―. 千葉大学園芸学部学術報告, 第58号, 59-66.

宮本知子 (2103). 茶道の稽古が幼児の配慮行動の形成に及ぼす影響に関する質的心理学研究. 兵庫教育大学 修士論文.

鈴木佳苗 (2007). 地域における体験学習・体験活動の効果に関する研究. 日本教育工学会論文誌 31, 209-212.

竹内美由紀・横川絹江 (2000). 体験学習による学習効果 ―高齢者疑似体験記録の内容分析を通して―. 香川県立医療短期大学紀要, 第2巻, 107-111.

東京学芸大学 平成19年度文部科学省新教育システム開発プログラム 体験活動に関わる報告書 (2008). <http://www.u-gakugei.ac.jp/~taiken/>

渡辺貴裕 (2007). 体験学習. 田中耕治 (編) よくわかる授業論. ミネルヴァ書房. 90-91.

謝辞

本調査を実施するにあたって快く協力してくださった、麻生公務員専門学校福岡校の教職員と学生の方々、また茶道体験ワークショップを手伝ってくださったNPOスタッフの方々に感謝申し上げます。